

大学生が振り返る小・中・高等学校でいじめを見た経験とその対処

安達 悠子¹・大澤 磨央²

(^{1,2} 東海学院大学)

要 約

大学生 120 名を対象に、小中高等学校でいじめを見た経験をいじめの内容ごとに捉えること、およびいじめを見かけた場合にとる対処を把握することを目的にした。その結果、からかい、悪口、仲間はずれといったいじめは見た経験が多く、悪事の強要や物の強請は少ないことが示された。この傾向は先行研究と同様であったが、物を隠されるのを見た経験が本調査では比較的多いことが示された。いじめを見かけた場合にとる対処は 138 件が報告され、KJ 法で分類したところ報告件数の多かった順に「先生など周りの人に伝える」、「加害者にやめるように言う」、「見て見ぬふりをする」などの 14 項目が得られた。上位項目は、先行研究で調査の選択肢として用いられてきた対処（「大人や友人に相談する」「かかわりをもたない」「とめる」など）と同様であった。また、「加担はしない」という「見て見ぬふりをする」と行動としては同じであっても、加担するかしないかを重要な境として意識し線引きする回答が見られた。そして、「声をかける」では“いじめっ子がいないところで声をかける”や「注意する」では“やんわりと注意する”，「その他」では“いじめている子の友人を遊びに誘い、いじめられている子から注意をそらす”といったいじめ現場と介入者との距離感を保つ観点が報告された。いじめを見た経験の多少により対処の内容や対処する際に働きかける対象が異なるかを検討したが、違いは見られなかった。

キーワード：いじめ、対処、大学生、小・中・高等学校、KJ 法

はじめに

学校でのいじめ認知件数と被害・目撃経験

小・中・高等学校（特別支援学校を含む）におけるいじめの認知件数は平成 26（2014）年度は 188,057 件であった（文部科学省, 2015）。文部科学省は毎年度末にいじめに関する報告を全国のすべての学校に求め、その実態を継続的に調査している。現行の形式で調査を開始した平成 18（2006）年度以降、調査年度でいじめの認知件数にばらつきは見られるものの 7 万件を下回ったことはなく（内閣府, 2016）、いじめは依然として憂慮すべき問題の一つであることが窺える。

小学校 4 年生から中学校 3 年生まで約 5,000 名を対象に生徒自らが回答する自記式で行われた調査によると、「仲間はずれ、無視、陰口」の被害経験率は小学生で約 5 割、中学生で約 3 割であり、小学校 4 年生から中学校 3 年生になるまでの 6 年間（調査 12 回）に一度も被害を経験しない者と加害を経験しない者はそれぞれ 13%に過ぎない（文部科学省国立教育政策研究所, 2013）。この

ように高い被害経験率および加害経験率が見られることから、学級という閉鎖的な空間においてその目撃率はさらに高くなることが推察される。白木（2013）は大学生 442 名に中学生時代を振り返っていじめについて回答を求める質問紙調査を行い、傍観者という形で 1 度以上いじめの現場を目撃したことがある者は調査協力者全体の 70%（傍観・被害・加害経験の合計は 76%）を占めたことを示している。

いじめの内容

いじめと見なされる行動は調査によって異なるが、文部科学省（2015）は毎年度末に行う調査で、「冷やかしくからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる（64%）」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする（23%）」、「仲間はずれ、集団による無視をされる（20%）」、「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする（8%）」、「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする（8%）」、「ひどくぶつかられたり、叩かれたり、

蹴られたりする（8%）」、「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる（5%）」、「金品をたかられる（3%）」、「その他（5%）」をいじめの態様の選択肢として挙げている（数値は平成 25（2013）年度の値で小中高等学校の合計でいじめの認知件数のうちに占めるいじめの態様ある。複数回答可のため合計は 100%にならない。）。

また、文部科学省国立教育政策研究所（2013）は、「仲間はずれにされたり、無視されたり、陰で悪口を言われたりした（48%, 35%）」、「からかわれたり、悪口やおどし文句、イヤなことを言われたりした」（43%, 35%）」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩たたかれたり、蹴けられたりした（33%, 25%）」、「ひどくぶつかられたり、叩たたかれたり、蹴けられたりした（22%, 14%）」、「お金や物を盗とられたり、壊わされたりした（13%, 9%）」、「パソコンや携帯電話で、イヤなことをされた（3%, 7%）」を選択肢に用いている（数値は 2012 年 11 月時に当該学期内で 1 度以上被害経験がある割合。前者が小学生、後者が中学生の値。なお、出典には男女別に算出されていたがここでは男女合計を算出し直して示した。）。これらを概観すると、悪口や無視や軽い身体攻撃は多く、程度がひどい身体攻撃や金銭・物の搾取は少ないことが全体的な傾向として見て取れる。

いじめへの対処

学校でいじめが起こった場合に速やかに解消することを目指し、教育再生会議（2006）はいじめ問題への緊急提言を示した（表 1）。そこでは提言 1, 2, 3 に見られるような教員を主とする子どもへの指導、仕組み作り（主に提言 2, 4, 5, 6）や保護者や政府の役割（順に提言 7, 8）を通したいじめへの対応を挙げている。学校側がとる対応としては、「学級担任や他の教職員が状況を聞く（91%）」や「学級担任や他の教職員が指導（66%）」、「保護者への報告（40%）」などが多い（文部科学省, 2015: 値は平成 26（2014）年度の数値。複数回答可であるため合計は 100%にはならない。）。

生徒自身が行う対処に関しては、厚生労働省（2009）が小学校 5 年生から 18 歳未満までの児童約 1,000 名に行った全国家庭児童調査を行い、いじめを見たときの生徒の対応は、「友達に相談する（36%）」、「先生に知らせる（26%）」、「別に何もしない（21%）」、「『やめろ!』と言って止めようとする（17%）」であったことが示されている。また、森田・滝・秦・星野・若井（1999）は、全国の国公立の小学 5 年生から中学 3 年生の生徒約 7,000

表 1 いじめ問題への緊急提言（教育再生会議、2006）

1	学校は、子どもに対し、いじめは反社会的な行為として絶対許されないことであり、かつ、いじめを見て見ぬふりをする者も加害者であることを徹底して指導する。
2	学校は、問題を起こす子どもに対して、指導、懲戒の基準を明確にし、毅然とした対応をとる。 教員は、いじめられている子どもには、守ってくれる人、その子を必要としている人が必ずいるとの指導を徹底する。日頃から、家庭・地域と連携して、子どもを見守り、子どもと触れ合い、子どもに声をかけ、どんな小さなサインも見逃さないようコミュニケーションを図る。
3	いじめ発生時には、子ども、保護者に、学校がとる解決策を伝える。いじめの問題解決に全力で取り組む中、子どもや保護者が希望する場合には、いじめを理由とする転校も制度として認められていることも周知する。
4	教育委員会は、いじめに関わったり、いじめを放置・助長した教員に、懲戒処分を適用する。 学校は、いじめがあった場合、事態に応じ、個々の教員のみに委ねるのではなく、校長、教頭、生徒指導担当教員、養護教諭などでチームを作り、学校として解決に当たる。生徒間での話し合いも実施する。教員もクラス・マネジメントを見直し一人一人の子どもとの人間関係を築きなおす。教育委員会も、いじめ解決のサポートチームを結成し、学校を支援する。教育委員会は、学校をサポートするスキルを高める。
5	学校は、いじめがあった場合、それを隠すことなく、いじめを受けている当事者のプライバシーや二次被害の防止に配慮しつつ、必ず、学校評議員、学校運営協議会、保護者に報告し、家庭や地域と一体となって解決に取り組む。学校と保護者との信頼が重要である。また、問題は小さなうち（泣いていたり、さびしそうにいたり、けんかをしていたりなど）に芽を摘み、悪化するのを未然に防ぐ。いじめを生まない素地を作り、いじめの解決を図るには、家庭の責任も重大である。保護者は、子どもにしっかりと向き合わなければならない。日々の生活の中で、ほめる、励ます、叱るなど、親としての責任を果たす。おじいちゃんやおばあちゃん、地域の人たちも子どもたちに声をかけ、子どもの表情や変化を見逃さず、気づいた点を学校に知らせるなどサポートを積極的に行う。子どもたちには「いじめはいけない」「いじめに負けない」というメッセージを伝えよう。
6	いじめ問題については、一過性の対応で終わらず、教育再生会議としてもさらに真剣に取り組むとともに、政府が一丸となって取り組む。

名にいじめに関する調査を行い、いじめを見たり聞いたときの行動は「いじめにかかわりをもたないようにした（45%）」、「やめるように注意した（25%）」、「大人に助けを求めた（10%）」、「おもしろがった（6%）」、「その他（21%）」であったことを示している。しかし、これらの調査は共に選択式の回答を用いている。そのためにいずれも調査時に用意された選択肢に挙げられた対処であり、生徒自身の意見を汲み取ったものではない^{注1}。当事者である生徒自身がどのような対処を考えているかを直接的に捉えることを試みた調査はこれまでにほとんどなされていないが、森田ら（1999）では「その他」が約 2 割を占めているように選択肢では捉えられなかった対処があると考えられる。生徒が考えている対処をより正確に捉えることは、解決に向けて被害者、加害者、傍観者、教職員等の学級に関わる全員での対応が求められるいじめ問題に効果的な介入を行う上でも有用であろう。また、本稿ではいじめを見た経験の多少と対処との関連についても焦点を当てる。経験の多少によって考える対処が同様であれば、同じ視点に立った話し合いが行われ

ると考える。一方で異なる対処が示された場合は、見た経験が多い者と少ない者が考える対処を相補的に活用することができるであろう。

目的

いじめの内容ごとに見た経験の多少を把握し、いじめを見かけた場合にどのような対処を考えるかを明らかにすることを目的とする。また、対処に関してはいじめを見た経験の多少により差異はあるかについても検討する。

方法

調査時期および参加者

2015年9月から10月にかけて岐阜県内A大学に所属する大学生1年生から4年生まで120名に回答を求めた。白紙回答を除外して110名を有効回答にした（男性47名、女性63名、平均年齢19.69歳、 $SD=1.13$ ）。

質問紙

いじめスケール（市川・山上, 1994）を用い、「髪の毛を引っ張ったり、腕をねじったり、足を引っかけられたりされるようなこと」などの20項目に対して「見た事がある」「見た事がない」のどちらかに丸をつけて回答するように求めた。その際は、今までの小学校・中学校・高校でのクラス内のことを振り返って回答するように求めた。そして、「いじめを見かけた場合、あなたはどうか

処したいですか。また、周りの人はどう対処すべきだと思いますか。」という質問に自由記述で回答するように求めた。本調査では回答のしやすさを重視し、対処する主体は回答者自身でも周りの人でもよいようにした。

研究倫理

回答は任意、匿名とし、著者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得て行った。

結果

いじめを見た事の有無

いじめの内容ごとに見た事の有無を把握するため、項目別に「見た事がある」「見た事がない」の人数と割合を「見た事がある」の降順に表2に示した。平均で8.45($SD=4.87$)個を見ていた。「見た事がある」の割合が高い項目は、からかい（項目1）や悪口（項目2）で、次いで物を隠される（項目3）、仲間はずれ（項目4）が続いた。悪事の強要（項目16, 20）や物の強請（項目17, 18）は「見た事がある」の割合が低かった。

対処の分類

いじめを見かけた場合の対処に関する問には110名中97名が回答しており（回答率88.18%）、複数回答があったため合計138件の回答を得た。このうち「静かに済むように対応」といった情報不足の回答や「いじめは終わ

表2 項目別「見た事がある」「見た事がない」の人数と割合

質問項目	見た事がある	見た事がない
1「ブタ」とか「デブ」などと言って、からかわれるようなこと	85(77.27)	25(22.75)
2「気持ち悪い」とか「不潔」とか「臭い」などと言われるようなこと	81(73.64)	29(26.36)
3 筆箱や靴などの持ち物を、取られたり、隠されたりするようなこと	80(72.73)	30(27.27)
4 皆で一緒にしているところに入れてもらえないで、仲間はずれにされるようなこと	78(70.91)	32(29.09)
5 動作が遅くて、「のろま」などと言われるようなこと	65(59.09)	45(40.91)
6 そばに行くと「近寄るな」と言われたりするようなこと	60(54.55)	50(45.45)
7 髪の毛を引っ張ったり、腕をねじったり、足を引っかけられたりされるようなこと	56(50.91)	54(49.09)
8 発表しようとする、からかわれるようなこと	55(50.00)	55(50.00)
9 嫌なのに、プロレスの技をかけられるようなこと	51(46.36)	59(53.64)
10 何をしても「あだの、こうだの」とケチをつけられるようなこと	48(43.64)	62(56.36)
11 ズボンやパンツを脱がされるようなこと	47(42.73)	63(57.27)
12 嫌なことを言われて、ぶたれたり、蹴られたりするようなこと	47(42.73)	63(57.27)
13 物をぶつけられたり、紐などでぶたれたりするようなこと	36(32.73)	74(67.27)
14 掃除道具入れとか、どこかの部屋に閉じ込めさせられるようなこと	34(30.91)	76(69.09)
15 「すましている」とか「まじめすぎる」とか「いばっている」などと言われて、口を聞いてもらえないようなこと	33(30.00)	77(70.00)
16 したくないのに、友だちをいじめさせられるようなこと	23(20.91)	87(79.09)
17 お金や漫画の本を、嫌々ながら持って来させられるようなこと	15(13.64)	95(86.36)
18 教科書や漫画の本を見せてくれないと、「遊んでやらない」と言われるようなこと	14(12.73)	96(87.27)
19 ぞうきんで顔を拭かれるようなこと	13(11.82)	97(88.18)
20 「宿題とかテストの答えを教えないといじめるぞ」と言われるようなこと	8(7.27)	102(92.73)

()は%

表 3 いじめを見た場合の対処の分類

分類	例	件数
1 先生など周りの人に伝える	先生に言う	33 (26.61)
2 加害者にやめるように言う	「何しているの?」と声をかける	18 (14.52)
3 見て見ぬふりをする	関わらない	17 (13.71)
4 とめる・助ける	止める	12 (9.68)
5 被害者に声をかける	「おはよう」と声をかけてあげる	7 (5.65)
6 話し合いをする	いじめっこにやめさせるようにみんなで話し合ったりする	6 (4.84)
7 加担はしない	いじめに参加しない	6 (4.84)
8 被害者と仲良くなる・一緒に過ごす	友人を連れて仲間に入れる	5 (4.03)
9 当事者(加害者・被害者・周囲の人)に話を聞く	なぜ、そこまでいじめるのか理由を聞く	4 (3.23)
10 雰囲気をよくする	時間をかけて、いじめが起きにくい雰囲気を作っていく	4 (3.23)
11 被害者の味方になる	いじめられている人に対して味方であるよう心掛ける	3 (2.42)
12 加害者に意地悪をする	いじている人の靴をばれないように隠す	3 (2.42)
13 記録を取る	いじめの内容を詳しく記録をとる	3 (2.42)
14 その他	いじている子の友人を遊びに誘い、いじめられている子から注意をそらす	3 (2.42)
		124 (100.00)
		()は%

ることではない」といった対処以外のことが書かれた回答 14 件を除き、124 件を著者が KJ 法（川喜多, 1970）で分類した。その結果、14 項目を得た。各分類の回答例と共に表 3 に示す。回答件数が多かった項目は順に、「1. 先生など周りの人に伝える」、「2. 加害者にやめるように言う」、「3. 見て見ぬふりをする」であった。「7. 加担はしない」という「3. 見て見ぬふりをする」と行動としては同じであっても、加担するかしないかを重要な境として意識し線引きする回答が散見された。

また、「5. 被害者に声をかける」では“いじめっ子がないところで声をかける”，「2. 加害者にやめるように言う」では“やんわりと注意する”，「14. その他」では“いじている子の友人を遊びに誘い、いじめられている子から注意をそらす”といったいじめ現場と介入者との距離感を保つ観点が報告された。

いじめを見た経験の多少による対処の違い^{注2}

いじめを見た経験の多少で対処に違いがあるかを検討するため、「見た事がある」に回答した数で参加者を 2 群に分けた。「見た事がある」に回答した数の度数分布を図 1 に示す。「見た事がある」に回答した数が 0 から 10 個であった参加者を少群（ $N = 68$ ），11 から 20 個であった参加者を多群とした（ $N = 42$ ）。

まず、回答率は少群が 85.29%で多群が 92.86%であった。少群と多群における記述の有無の相違を検討するために χ^2 検定を行ったところ、少群と多群に記述の有無の差は見られなかった（ $\chi^2 = 1.43$, $df = 1$, $p = .23$ ）（表 4）。

次に、分類で件数が多かった上位 4 項目と 5～14 項目をその他としてまとめた 5 項目に対して、少群と多群に

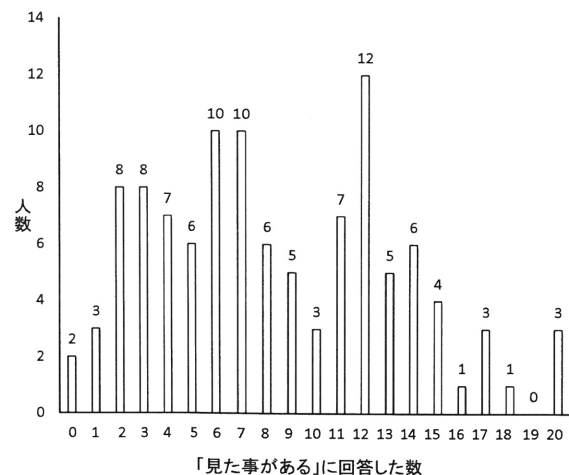


図 1 度数分布

おける記述の相違を検討するために χ^2 検定を行った。その結果、少群と多群に記述の差は見られなかった（ $\chi^2 = 3.92$, $df = 4$, $p = .42$ ）（表 5）。

また、誰に対して働きかけているかという観点から、分類項目を周囲（項目 1, 10, 13）、回答者自身（項目 3, 7）、加害者（項目 2, 12）、被害者（項目 5, 8, 11）、不明（項目 4, 9, 14）の 5 つに区分した。この 5 区分に対して少群と多群における記述の相違を検討するために χ^2 検定を行った。その結果、少群と多群に記述の差は見られなかった（ $\chi^2 = 3.95$, $df = 4$, $p = .41$ ）（表 6）。すなわち、いじめを見た経験の多少によっていじめを見た場合の対処は、回答率、対処の内容、対処対象のいずれにおいても差は見られなかった。

表4 記述の有無 少群と多群別の件数

	少群		多群	
記述あり	58	(85.29)	39	(92.86)
記述なし	10	(14.71)	3	(7.14)
	68	(100.00)	42	(100.00)

()は%

表5 対処の分類 少群と多群別の件数

分類	少群		多群	
1 先生など周りの人に伝える	19	(25.68)	14	(28.00)
2 加害者にやめるように言う	9	(12.16)	9	(18.00)
3 見て見ぬふりをする	9	(12.16)	8	(16.00)
4 とめる・助ける	10	(13.51)	2	(4.00)
5-14 その他	27	(36.49)	17	(34.00)
	74	(100.00)	50	(100.00)

()は%

表6 対処の対象による区分 少群と多群別の件数

区分	少群		多群	
周囲 (項目1,10,13)	27	(36.49)	19	(38.00)
回答者自身 (項目3,7)	12	(16.22)	11	(22.00)
加害者 (項目2,12)	11	(14.86)	10	(20.00)
被害者 (項目5,8,11)	9	(12.16)	6	(12.00)
不明 (項目4,9,14)	15	(20.27)	4	(8.00)
	74	(100.00)	50	(100.00)

()は%

考察

いじめを見た事の有無

いじめの内容ごとに見た事の有無を尋ねた結果、からかいや悪口、仲間はずれは「見た事がある」の割合が高いことが示された。これは文部科学省(2015)や文部科学省国立教育政策研究所(2013)での調査と同様の傾向であったと言える。また、悪事の強要や物の強請は「見た事がある」の割合が低かった。悪事の強要に関しては、文部科学省(2015)で「嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする(8%)」の割合が低かったこと、物の強請については文部科学省(2015)で「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする(8%)」や「金品をたかられる(3%)」が低かったことおよび文部科学省国立教育政策研究所(2013)で「お金や物を盗とられたり、壊わされたりした(13%, 9%)」の割合が低かったことと同様の傾向であり、概ねこれまでの調査と同様の結果が示された。

ただし、本調査で物を隠されるは「見た事がある」の割合が3番目に高かった。先行研究の身体的攻撃において軽度は被害割合が高く、重度は被害割合が低いように、金銭は割合が低くても物品は割合が高くなった可能性がある。すなわち、文部科学省(2015)では「金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする」と文部科学省国立教育政策研究所(2013)では「お金や物を盗とられたり、壊わされたりした」と金品を一つに

括っていたが、本調査では「筆箱や靴などの持ち物を、取られたり、隠されたりするようなこと」と金銭は含まず、筆箱などの比較的安価な品に限定されていたために見た事があるの割合が高くなった可能性が考えられる。

対処の分類

いじめを見かけた場合の対処を回答するように求めて分類した結果、「先生など周りの人に伝える」、「加害者にやめるように言う」、「見て見ぬふりをする」などの14項目が挙げられた。「先生など周りの人に伝える」は内閣府(2016)で「友達に相談する(36%)」、「先生に知らせる(26%)」と割合が高く、森田ら(1999)でも「大人に助けを求めた(10%)」がある。また、「加害者にやめるように言う」に関しても、内閣府(2016)で『やめろ!』と言って止めようとする(17%)、森田ら(1999)で「やめるように注意した(25%)」がある。「見て見ぬふりをする」についても、内閣府(2016)で「別に何もしない(21%)」、森田ら(1999)で「いじめにかかわりをもたないようにした(45%)」と高い割合を示しており、対処の内容として多い回答はこれまでの調査と同様であることが示された。森田ら(1999)に見られた「おもしろがった(6%)」に該当する回答はなかった。

また、「加担はしない」という「見て見ぬふりをする」と行動としては同じであっても、加担するかしないかを重要な境として意識し線引きする回答が散見された。いじめでの加害者・被害者以外の周囲の人について、自分で直接手を下さないが周りで面白がってはやしたてる「観衆」と見て見ぬふりをする「傍観者」といった区分がしばしば指摘されるが(e.g., 森田・清水, 1994; 蔵永・片山・樋口・深田, 2008), この違いを生徒自身も意識していると言えるだろう。この根幹にはいじめをよくないものと捉えるいじめの否定規範(e.g., 大西・吉田 2010; 中村・越川, 2014)と共通する価値観があると考えられる。いじめの否定規範はいじめの抑制に繋がる要因であることから(e.g., 大西・吉田 2010; 中村・越川, 2014), 加担はしないと踏みとどまるような線引きをもたらず生徒らの価値観はいじめ解消に向けた正の要因だと考えられる。しかしながら、本調査では回答の一つに“自分がいじめの体験をしたことがあるので少しでもいいので気にかけてくれる、話を聞いてくれるだけで十分うれしいので、無視だけはいけないと思います。”とあった。「見て見ぬふりをする」と「加担はしない」は表面的な行動は同じになるケースが多いと考えられるため、線引きをもたらず意識がどのようにすれば顕在化されて積極的な

介入に繋がるかについてのメカニズムは今後に解明していく必要があるだろう。

そして、本調査では見たいじめに介入する際にいじめ現場と介入者との距離感を保つ観点が見られた。いじめを見た際に周囲の人には、「助けると自分もいじめられる」といった不安や恐怖が生じる。そうした不安や恐怖のために介入の意思を持ったとしても介入行動に至らず傍観にとどまることは繰り返し指摘されてきたが(e.g., 山崎, 1985; 大坪, 1998), 本調査の結果は必ずしも傍観行動だけにとどまらずに生徒は巧妙に事態へ介入する可能性を示唆していると言えるだろう。生徒自身が考えるこうした介入方法にはいじめ解消への手がかりとして学ぶところがあると考えられる。

いじめを見た経験の多少による対処の違い

いじめを見た経験の多少によっていじめを見た場合の対処の違いを検討したところ、回答率、対処の内容、対処対象のいずれにおいても差は見られなかった。見た経験が多くても少なくても考える対処は同様であることから、同じ視点に立った話し合いが円滑に行われる土壤があると考えられる。

本調査の限界

本調査では小中高等学校でいじめを見た経験をいじめの内容ごとに捉えること、およびいじめを見かけた場合にとる対処を把握することを目的にした。いじめを見かけた場合にどのような対処を考えるかは大学生自身の記述から示されたが、どのような要因が効果的な介入行動に繋がるかというメカニズムに関しては今後の検討課題である。また、いじめを見たときの対処については回答を促すために、「あなたはどうか対処したいか」、「周りの人はどうか対処すべきか」を併記した。そのため、どちらへの回答であるかは不可分であった。自身が対処する場合と他人が対処する場合では対処が異なる可能性があるため、両者を区分した検討も今後の課題である。

謝辞

本調査は大澤磨央氏の平成 27 (2015) 年度卒業論文「いじめを見たときの対処に関する研究」を再分析してまとめたものである。調査時には多くの方が回答に協力下さいました。この場をかりて改めて御礼申し上げます。

注

注 1. いじめに関する議論では少数のケース分析や個人的

な経験を一般化したものが散見される。そうしたなかでこれらの調査は児童/生徒自身に回答を求めて大規模に行われた貴重な調査である。また、大人や友人など人に相談すること、かかわりをもたないようにすること、やめるように注意することは各々1~4割を占めていたことから、調査で用いられた選択肢はいずれも児童/生徒の主たる対処であったことが示される。

注 2. 本稿には対象者を 2 分割した結果を示したが、3 分割をした場合でも結果は同様であった。いじめを「見た事がある」に回答した数が 0 から 5 個であった参加者を少群 ($N=34$), 12 から 20 個であった参加者を多群 ($N=35$) として同様の分析を行ったところ、回答率 (少群 85.29%, 多群 91.43%; $\chi^2=0.63$, $df=1$, $p=.43$), 対処の内容 (少群は分類上位から順に 11, 4, 4, 7, 14 件, 多群は分類上位から順に 10, 6, 8, 2, 14 件; $\chi^2=4.56$, $df=4$, $p=.34$), 対処対象 (少群は順に 17, 5, 4, 4, 10 件, 多群は順に 13, 10, 7, 6, 4 件; $\chi^2=5.99$, $df=4$, $p=.20$) のいずれにおいても差は見られなかった。

引用文献

- 市川千秋・山上克俊 (1994). いじめ調査票 三重大学教育学部市川千秋研究室発行 (未刊行)
- 川喜多二郎 (1970). 続・発想法—KJ 法の展開と応用— 中央新書
- 厚生労働省 (2009). 平成 21 年度全国家庭児童調査結果の概要
- 蔵永瞳・片山香・樋口匡貴・深田博己 (2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響. 広島大学心理学研究, 8, 41-51.
- 教育再生会議 (2006). いじめ問題への緊急提言—教育関係者, 国民に向けて—
- 文部科学省 (2015). 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査結果について
- 文部科学省国立教育政策研究所 (2013). いじめ追跡調査 2010-2012—いじめ Q&A—
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井彌一 (1999). 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集— 金子書房
- 内閣府 (2016). 平成 27 年版子供・若者白書
- 中村玲子・越川房子 (2014). 中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討. 教育心理学研究, 62, 129-142.

大坪治彦 (1998). いじめ傍観者の援助抑制要因検討. 鹿
児島大学教育部研究紀要 教育科学編, 50, 245-256.

大西彩子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズ
ム—集団規範の影響に着目して—. 実験社会心理学研究,
49(2), 111-121.

白木優馬 (2013). いじめ場面における傍観者の援助行動を
生起させるには—計画的行動理論および傍観者の自己認
知からの検討—. 教育心理学フォーラム・レポート
FR-2013-02

山崎森 (1985). いじめの構図 ぎょうせい

How to cope with bullying when children witness it in elementary and

high schools

Yuko Adachi, Mao Osawa

Abstract

This study proposed to capture the experience of witnessing bullying, type of bullying, and how to cope with it in elementary and high schools. A questionnaire survey was conducted on one hundred and twenty university students. Results revealed that teasing, backbiting, and ostracizing were forms of bullying that were more common when compared with wrongdoing or extortion for goods. These findings were similar to those of previous studies. However, in this study, a number of instances of seeing hidden objects, as a form of bullying, were reported. Participants described 138 ways they adopted to cope with bullying. The author used the KJ method to categorize these coping methods into 14 items. The most common description of the coping method used was “Conveying to people around oneself such as teachers,” followed by “Asking the bully to stop bullying,” and “Turning a blind eye to bullying.” These responses were similar to those revealed in previous studies. Some participants appeared to be precise about their viewpoints on “Do not join the bullies.” In addition, participants answered that they employed interposing methods to keep distance from the bullies: “Speaking to bullied children when the bully was not around” in the “Speaking to someone” category, “Offering a non-judgmental suggestion” in “Giving a warning” category, and “Inviting a friend of the bully to play to divert the attention of the bully” in the “Others” category. Regarding the coping methods adopted to deal with bullying, not many differences were observed between people who had seen a lot of and people who had seen less bullying.

Keywords: Bullying, Coping, Students, KJ method